FACULTY OF LETTERS

文学部生のリアルな！学生生活 Vol.60

13専攻・1プログラムから成る文学部の充実したキャンパスライフと、
文学部ならではの多様な学びの情報を発信します。

中央大学公式Webサイト／学部情報／文学部
chuo-u.ac.jp/academics/faculties/letters/

南仏エクサン・プロヴァンスの9カ月

文学部人文社会学科フランス語文学文化専攻4年
東京都立大泉高等学校出身
高津（たかつ） 里菜（りな）

文学部の4年間を振り返る

大学時代は人生の中で最も自由で自分の興味のあることを追求できる貴重な時期だと思っています。私が文学部生活で熱中したのは、フランス語の勉強であり、田口先生のゼミでフランス文学の勉強を頑張りました。その結果、大学のプログラムで留学に行かせていただきました。ほかにも、通常の学業に加え、司書課程を履修し、学外の活動では2年次に地元の成人式の実行委員を務め、代表の挨拶をさせていただきました。この4年間で、やりたいことを一生懸命やることができ、成長できたと感じています。今回は、中でも特に貴重な経験ができた、フランス留学について書きたいと思います。

留学をするに至ったきっかけ

中学の時に先輩の留学体験談を聞いてから、海外留学に漠然とした憧れを持っていました。しかし、一人で海外に暮らすことや治安への不安があり、なかなか決心ができませんでした。しかし、留学は人生でなかなかできるものではないし、せっかく大学でフランス語を学んでいるのだから……と思い、フランスへの留学を決心しました。

留学の思い出

文学部事務室ならびに国際センターの皆さまにご協力いただき留学の手続きを無事に終え、2023年8月24日、私は羽田空港からエクサン・プロヴァンスという都市に向けて出発しました。留学先は国立の大学であるエクスマルセイユ大学でした。

留学初日は、「どんな風景、どんな人が待っているのだろう」とワクワクしていました。その日は年に数回の熱波で、とても外に出ることができませんでしたが、熱波が過ぎた後、Centre-villeという中心街に行きました。そこには、自然と調和した色鮮やかな建物や、17世紀の街をそのまま残したようなミラボー通りなど美しい景色が広がっていました。昼からレストランでのんびりする人や日本では見ない建物…この町では常に新たな発見がありました。また、大学主催のウェルカムパーティーでは、韓国人やドイツ人など、さまざまな国籍の人とかかわることができました。

エクサンプロヴァンスの街並み

語学学校のクラスの仲間たちと

学期が始まると、主に大学付属の語学学校でフランス語を勉強することになりました。大学付属の語学学校といえば、いろいろな国籍の学生が集まるものと思っていましたが、現地で仕事をしている社会人や紛争地域から来た難民、旅行者などもいて、年齢や職業もさまざまでした。

授業では間違いを恐れず手を挙げる人が多く、文化の違いを感じました。クラスメイトとの会話はフランス語。お互いに失敗して当たり前なので、文法など多少間違っていてもお互い気にする必要はなくフランス語で話をして

いました。周りの仲間もフランス語のネイティブではないので、完璧に話すことよりもとにかく話したいことを伝えることが大事だということに気づきました。放課後のパーティーでは、自分たちの国の料理を持ち寄り、それぞれの国の食文化を楽しみました。ベトナム、韓国、ブラジル、どの料理もおいしく、食文化の違いも肌で感じました。

後期は大学の専門授業に参加し、本格的にフランス語を使う機会が増えました。私が通っていた大学には日本語学科があり、日本語を話したがっている友人がたくさんできました。熱心に日本語を学ぼうとしている人が多く、そんな友人たちと授業後には学食へ、放課後にはパーティーへ出掛けました。

課外活動では多くのイベントにも参加しました。その一つが、TANDEMという大学主催の言語交換プログラムです。これは、現地の学生とペアを組み、お互いの言語を一緒に学びながら、相手の家でホームパーティーをしたりするものです。学外では、マルセイユでの秋祭りやクリスマスマーケットのボランティアにも挑戦しました。ここでも、在仏の日本人や他大学の学生との出会いがあり、大学以外のつながりを広げることができました。また、〝バカンス〟といわれる長期休暇には、現地の友人とハロウィンパーティーをして過ごしたり、別の地域で留学していた中央大学の友人とイタリアに旅行したりして、めったにできないような経験をすることができました。

留学生仲間と

旅行先のイタリア・ローマ

この留学を通して感じたことは、「自分から動かなければ、何の経験も得られない」ということです。語学も同様で、自分から話し掛けるというアクションを起こさなければ、決して上達することはありません。失敗を恐れず自分から一歩を踏み出すことが大切だと痛感させられました。

留学での経験は忘れがたく大変貴重で、自分の視野を広げ、価値観を変えるきっかけとなりました。これから先の人生では、自分から積極的に多くの人とかかわり、さまざまなことにチャレンジしていきたいです。

終わりに

私が大学生活でやりたいことを実現できたのは、周りの支えあってのことです。今回、この「草のみどり」を書く機会を頂き、改めて、そのことを感じました。仲良くしている友人たち、留学の推薦書を書いてくださったゼミの田口先生、そして、どんなこともサポートをしてくれた両親に、この場をお借りして感謝を伝えたいと思います。残り半年ほどで社会人になりますが、卒論研究をしながら一生懸命精進していきます。

文学部だより

2万冊に囲まれて

英語文学文化研究室

文学部英語文学文化専攻は、「イギリス文学文化」「アメリカ文学文化」「英語学」の３つの専門分野を取り扱い、幅広い研究領域をカバーして学生の皆さんの興味関心に応えています。

４年間のカリキュラムでは、1・2年次に上記３つの分野を幅広く学修しながら英語力を高め、３年次からは英文専門演習（ゼミ）を中心により一層学びを深掘りしていきます。４年次には大学の学びの集大成として卒業論文・卒業課題研究の執筆に取り組みます。

卒業論文・卒業課題研究のテーマを決めたり専門分野の内容を掘り下げたりしていく際、ご子女の皆さまに活用していただきたいのが共同研究室です。

３号館５階にある英語文学文化専攻共同研究室には、専任教員が選定した原書を含む2.2万冊を超える専門図書が所蔵されており、課題・研究に必要な参考文献がそろっています。

また先輩が執筆した卒業論文の中から、各分野の教員が選んだ優秀な論文をまとめた機関誌「英米文学研究」も閲覧できます。論文執筆の際は、この機関誌への掲載を一つの目標として研究に励むのもよいかもしれません。

専門的な資料だけでなく、英米文学文化・英語学の入門書や辞書、英語で書かれた本に親しむためのレベル別教材・CDなど、基礎を固めるのに役立つ資料も充実しています。図書の閲覧だけでなく、パソコンや自習スペースを使って授業の予習・復習をしたり、グループ学習をしたりすることも可能です。

共同研究室は学部学生だけでなく大学院生や教員も利用するため、広く交流の場としても活用できるようになっております。ご子女に何かお困り事がございましたら、一度共同研究室に足を運ぶようお伝えいただけますと幸いです。